

「あなたのために、私が変わります」

エペソ人への手紙 3 : 1

September.18.2022

エペソ人への手紙 3 : 1 (パウロ)

Preface

使徒パウロは今、イエス・キリストを信じ、キリストを宣べ伝えるキリスト者だということゆえに、牢獄に繋がれた囚人となっています。

そんなパウロは言った言葉、エペソ書 3 : 1 の「あなたがたのために、囚人となっています」というこのパウロの言葉を黙想していると、最近聞きましたキリスト教カウンセリングの短い講義の中で聞いた言葉、「あなたのために、私が変わります」という言葉が思い出されました。

「あなたのために囚人となっています」という言葉と、「あなたのために私が変わります」という言葉に、共通点を感じました。

二つの言葉とも良い出会いを経験し、その出会いが、人生観や価値観や人を見る目を変えてしまう程のものであったらという共通点を感じました。

私が聞いたその講義の中では、「あなたのために私が変わります」という言葉を、「あなたのために、私を直します」とも言っていましたが、この「あなたのために、私が変わります。あなたのために、私を直します」という言葉が、ジワーっと心の中心に刺さってきました。

これまで、幾度となく、「私のために、あなたが変わらなさい」、「私のために、あなたが直しなさい」という思いで生きてきた事、そして人に対して、「私のために、あなたが変わり、直しなさい」と説き伏せようとし、罪に定め、「あなたさえ変われば、もっと状況は良くなるだろうし、正しいことが正しく行われるだろうし、世の中良くなるだろうに」という自らの思いを正しいと思いながら生きてきたことを、静かに、ズンと、しみじみと感じました。

例えば、運転一つとってもそうです。

自分が乱暴な運転をしていることは露知らず、乱暴な運転をしている人を見ると、「なんて奴だ！ だから、茨城は運転が荒いんだとか言われるんだよ」と自分のことは棚に上げたりします。

妻や子供たち、両親や兄弟、仕事の仲間や同僚、友人知人、ニュースや新聞を見る時、ついには道行く人やすれ違う人にまで、「あなたが変われば、あなたが直せば」と、やたらと思っていることに気付かされます。

でも、結局のところ、私が変われば、私が折れれば、私を直せば、私の自我が死ねば物事良くなることを、私たち世の中皆、どこかで本能的に知ってはいます

が、喜んで自分に死ねないことに誰もが日々葛藤します。

Part One

今の世の中、皆が皆、自分を生かすことに躍起になっている、ならざるを得ない感がありますが、

でも使徒パウロを見ますと、自我に死んでいるという自由を味わっている、自分で自分を生かすという呪縛から解き放たれ、キリストゆえに、自分に死んでいるという自由を味わっているのを感じます。

なので、こんなことをサラッとやってのけます。

コロサイ人への手紙 3 : 3 (パウロ)

ガラテヤ人への手紙 2 : 19 b - 20 a (パウロ)

ローマ人への手紙 6 : 11 - 12 (パウロ)

到底自分の力ではどうすることも出来ない自我に死ぬということが、キリストゆえに自分の内になされていることを、パウロはこの上もない喜びだと、自由だと感じております。

自分を生かそうとするから苦しい。

神の前であって罪人であり、その罪ゆえに死んでいるということを認められることこそ、自由と解放と救いであることをパウロは分かっていました。

それゆえに、「あなたがたのために、私は囚人となっています」ということを喜びの内に告白し、「あなたのために、私が変わります」ということを感謝をもって体現しています。

これは、パウロの内に住んでいて下さる聖霊なる神様のお働きであることは間違いないことですが、

この囚人となっているパウロを通して神様は私たちに、「どうすれば、自分に死ぬという自由を得ることが出来るのか？」ということ、さらに深く突っ込んで教えて下さっているように感じます。

即ち、「いつ自分に死ぬのか?」、それは、ただ唯一神の御姿なるお方イエス・キリストに恵みの内に出会う事だということです。

そしてその出会いの中で、自分自身の姿を正直に吐露し、さらけ出し、見つめ、認めることが出来た時、さらに、その恵みがあまりにも大きくて、その恵みに対して負債を感じる程になった時、自分に死ぬという「あなたのために、私が変わります」という自由を体験することになります。

実際にパウロは、ローマ書 1 : 14 で、

ローマ人への手紙 1 : 14 (パウロ)

と言いながら、与えられた信仰があまりにも大きな祝福で、神に対して人に対して大きな負債を感じる程ゆえに、その負債を他者のために死ぬることをもって返すと告白します。

Part Two

「私たちの人生、誰とどう出会ったかで左右される」というようなことが良く言われたりしますが、確かに私たちの人生において、出会いほど重要なことはないと思います。

「あなたに出会ったことが、私にとって大きな祝福です」と言えるような出会いがあったら幸いなことですが、誰に出会って祝福となるのかということを経極的に突き詰めていきますと、「果たして、私に出会った人たちは、私に出会ったことが祝福となっているだろうか?」、「『私に出会ったことが、あなたにとって大きな祝福となる事を願います』というように、生きることが出来るだろうか?」ということに行き着いてしまいます。

つまり、「『あなたのために、私が変わります。あなたのために、私を直します』という思いで生きることが出来るだろうか、もしそうであるならば、きっと私との出会いがその人にとって祝福となるだろう」ということです。

「じゃあ、どのようにすれば、私に出会ったことがその人に祝福となるように生きられるのだろうか」と考えますと、やっぱり、誰とどう出会うかにかかっていると思うんです。

結論的に言いますと、イエス・キリストにどのように出会っているのかということに、「私との出会いが、あなたにとって祝福となる」ということに直結して行くことでしょう。

なぜならば、イエス・キリストほど、「あなたのために、私が変わります。あなたのために、私を直します」と、体現された方はおられないからです。

「あなたのために、私が変わります。あなたのために、私を直します」の極致、その表れが主イエス様の十字架だからですね。

私が初めて聖書を創世記から黙示録まで通読した時、心に残った印象は、変わらない人間、変わろうとしない人間の姿でした。

神様は何度も何度も「あなたがたは変われるはずだから、変われるから、そして変わることがあなたがたにとって幸いとなり、祝福となるから私の御言葉に従って変わって見なさい」と期待をもって、私たち人間にずっと接し続けてくださいますが、当の期待されている側の私たち人間は、全くもってその神様の期待に応えることが出来ておらず、自ら滅びを招き、自ら滅びを選び取っているかのように進み、結局滅びをもって終わってしまうという現実を、もどかしさとじれったさと悲しみをもって、聖書は真つすぐに人の本質を語っていました。

イザヤ書48：4，8（パワポ）←（8節は“ずっと前から、”という箇所から載せてください）

どんなに神様が語っても、その存在をありとあらゆること、もの、万象をもってお示しになっても、心は頑なで、首は突っ張っていて、頭は固く、聞こうともしなければ、まともに知ろうともしない。

たとえ聞いたとしても、必ずや裏切りを働くような存在が私たち人間だと言います。

人の言葉ではありません。

神様の言葉です。

神様をしてまでも、どうしようもない頑固者が私たち人間だというのです。

じゃ、どうしますか？

そんな奴、けっつまずこうが、倒れようが、滅びようが、いなくなろうが放っておけばいいでしょうか？

自分の身から出た錆、自業自得、自分で蒔いた種だから、放っておけばいいでしょうか？

Part Three

聖書は、神様のことを父なる神と言いますが、どれほどに父なる神かと言いますと、どんなに身から出た錆、自業自得、自分で蒔いた種だとしても、その錆を、その悪行を、その蒔いた種を自分事として考え、子が変わらないならば、その子を生んだ父としてご自身が変わると、ご自身が折れると決心され、実際に、父なる神が、神らしからぬお姿に変わられ、折れました。

その父なる神様が、私たち一人一人のためにお変わりになった姿が、主イエス・キリストの誕生であり、主イエス様の十字架です。

親は子供に変わることを、直すことを、改善することを毎日願って注意し、叱りますが、子供が変わったためしがありますか？

もし子供が変わったとしたら、それは、先に親が変わったからこそその実りですね。

子供と親がぶつかった時、まともな親ならば、必ずや子ではなく、親の方が先に折れます。

親の方が変わります。

そして、いつ親が折れたのかという愛情、親が変わってくれたという愛に子が気付くかと言いますと、大分後になってからです。

もしかしたら、親が活着ている時には気付けないことの方が遥かに多いのかもしれない。

親が死んでから、親が親であったこと、親の愛や大事さに気付いたりします。

聖書が私たちに教えてくれる大切なことのうちの 하나가、神は父であるということです。

私たちが理解し降伏する前から父なる神は父であり、分別もなく幼稚であった時も父であり、私が悟り知り信じてからは、さらにさらに父であられるお方が、天地万物をお造りになった聖書の語る唯一の父なる神様です。

主イエス・キリストは、父なる神様が情け深く、あわれみ深い神であられ、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわざを思い直される方であるという愛なる神であるということの体現であられるばかりか、一切変わる必要もなければ、一切直すところもない完全な神の御姿なるお方ですが、そんなお方が、私たち一人一人のために「あなたのために私が変わり、あなたのために私を直します」と仰ただけでなく、それを実践されました。

ピリピ書 2 章にある通りですね。

ピリピ人への手紙 2 : 6 - 8 (パウロ)

「あなたのために、私が変わります」の極致が、イエス・キリストの十字架です。

このイエス・キリストに出会うことが、「あなたのために、私は囚人となっています。あなたのために、私が変わります」という何物をも奪うことの出来ない喜び・自由を得る唯一の道です。

どんなことをもってしても、とてとて返すことの出来ない恵みを負債と感じるように、イエス様に出会わせていただけることほど幸いなこともなければ、自由なこともないでしょう。

イエス・キリストゆえに囚人であることを喜べてしまうばかりか、イエス・キリストがしてくださったことゆえに「私が囚人となります」と言ってしまうんですから、お手上げです。

そんな人に対して、何が出来ますか？

Part Four

私たちが、パウロがそうであったように、苦難さえも栄光だと言ってしまうほどのイエス様に出会い知れるようにと、エペソ書 3 章の後半部分を読みますとパウロが祈ります。

私たちがイエス様にどう出会っているのかが、どのようにイエス様のことを知っているのかが、「あなたのために私が変わります。あなたのために私を直します。私に出会ったことが、あなたにとって祝福となりますように」というような生き方に繋がってきます。

私たちがイエス様に会い信じるようになった時、最も大きく変わることが、自分という存在を肯定出来るようになることですが、「こんな私を高価で尊い。『わたしはあなたを愛している』」と言って、すべてを赦し、すべてを受け入れ、存在そのものを肯定して下さることにもものすごい安堵感と解放を覚えますが、

この安堵感が、まかり間違うと、自らが自らを肯定する時に絶大な威力を発揮するようになります。

そして、他者を非難したり、否定したり、罪に定めたりする時にも、絶大な威力を発揮させてしまいます。

「神に愛されているこの私が、イエス様の命に変わるほどに大切なこの私の言うこと、やることこそ正しいのよ」というスイッチが突如として入ってしまいます。

これが、また私たちの弱さでもあり、罪深いところでもあります。

ですが、イエス様は、ただ一度も、「このわたしのためにあなたが変わりなさい、このわたしのためにあなたが直しなさい」というようなことを口にされたこともなく、ただご自分を空しくし、低くされ、しもべの姿となられ、私たちのためにご自身が変わられました。

なぜそれが出来たのか？

父なる神様の前にあって、御子として正直にご自分のことを見据え、さらけ出し、告白することをためらわなかったからですね。

私たち人間は、意識してか、無意識か、自分で自分のことを大きく見せようします。

そして、劣等感や傷や欠点を包み隠し、自分の持つ劣等感や傷や欠点を正直に見つめ認めようとするのが嫌で、その代わりに逃避してしまいます。

さらに、逃避した先で、私にある劣等感や傷や欠点を他人に見出し、投影し、信仰者ならば、信仰と言う名において自分を神様の前にさらけ出す代わりに、「あの人のせいで自分がこうなんだ」と、自分の思う自分の正しさによって、その場を切り抜けようとしてしまいます。

でも、イエス様は違いました。

「あなたのせいで、わたしがこうなった」なんてことはひと言も仰いませんでした。

「そんなあなたのために、私が死にましょう」と言って、十字架に架られました。

それがイエス様です。

このイエス様に、私たちがどのように出会っているのかが、「私との出会いが、あなたにとって祝福となりますように」という生き方に繋がってきます。

そして、パウロがそうであったように、「あなたのために、私が変わります。

あなたのために、私を直します。あなたのために、私が囚人となります」という祝福、恵み、喜び、自由を身に帯びながら生きることに繋がります。

Conclusion

最後にもう一言だけ、パウロの言葉を見て終えたいと思います。

ピリピ人への手紙 2 : 21 (パウロ)

イエス・キリストのことを求めましょう。

自分自身のことを求めたところで、救いもなければ、自由もなければ、解放もなければ、知恵もなければ、知識もなければ、富もなければ、満足もなければ、真理も、喜びも、愛もありません。

「あなたのために、私が死にましょう」、「あなたのために、私が変わらしましょう」と体現して下さったイエス・キリストのことを求めることにのみ、今言い並べたようなことがあり、いのちがあります。

そしてもし、そんなイエス様のことを求めたならば、「その人が私を傷つけた」と思うところから、「私にも問題がある」ということに気付けるでしょう。

もし、イエス様のことを求めたゆえに私を直すならば、怒りが感謝に変わることでしょう。

もし、イエス様のことを求めたゆえに私が変わるならば、被害者としての人生から解放され、「あなたのために、私が変わります」という自由と喜びを、父なる神と共に味わうこととなるでしょう。

私たち皆が、他者にとって祝福となることをお祈りいたします。

お祈りいたしましょう。

祝祷：エペソ書 3 : 1